第六話

天からの悟りのことば

私自身の仕事を優先させた為に、二人の宝の我が子どもと、別れる事になってしまいました。

この時の私の心には、どのような悪魔が、潜んでいたのであろう。

どんな理由があろうと、親と子は、離れてはいかん。

私には、それ以来、当然ながら、天罰が、数十年間、毎夜、家族の悪い夢ばかり見て、うなされておりました。

もう、このような苦い夢ばかり、見るのであれば、死んだ方が、いいのでは、となんど思った事であろう。

ある時は、街を歩いている子どもが、別れた我が子に見えて、涙が、出てきた。

国雄、光国は、いま、どうしているのだろ

うか。私の生活よりは豊かとは、思うが、心は、どのように育ったであろうか。こんな馬鹿な父の手本を見て、「このような親にはなりたくない」と思い、心の広い人間となっている事を願っている。

いい訳をする心はないが、現在は、いじめられている子ども、そして悩んでいる人たちの役にたてばとの思いで、活動を続けているから、少しは人間としての役目をさせてもらっているかナ……。

森の中心は、今日も子ども達の遊び場になる。遊具を作っている。

そして、このところ、日々作業に追われて、いる中で、なにか、心のなかと言うか、頭のなかというか、もやもやが、消えている。なんだ、この気持ちは。

いままで何十年となかった心のなかに、光が道を照らして私を導いているようだ。

そして私は、夜に寝ている時の変化に気がついた。

何十年間も苦しい夢のなかで支配されていた
私の〝苦しい夢〟が〝消えていたのだ！
そうか！〝これが神様なのか〟天の神の答
えなのか！
神は！・・・子どもの為に我が身を犠牲にし
て！遊具を作っている私を見ていて下さっ
たか！天は全人を見通ていて！その人に
相応しい答を与えて下さるだ！
〝天はこの私に弱者のため！悩んでいる子ど
もの為に命を賭けて！この活動をやるのだ〟
とおっしゃって おられるのだ。
オッス！良くわかりました。この命でよけれ
ば！この森に！この活動に私の命を！ささ上
げます。二〇〇七年いま現在継続させてもら
っております。

第七話

死んしまった！
いじめによる自殺

平成六年十二月四日（日）くもり。
私は子どもたちが遊びながらに学べる冒険を作くっている時に！体のどこかを！傷付けている。
今傷をつけている！所は！足の「ソコレッチフイズ」というところである！
いつもの事ながら！病院には行かない。
このような痛みは！生れて初めての事である。
歩くのが！つらくなってきた！
しかし足を除いて人の鍛練は済む人から下界の喫茶店に新聞を読みに行く。
いつものように！日記を書き終わり！さあ新聞を見るか！えー！新聞をとりに行ったがないのだ！
名古屋では！朝のモーニングサービスの時

間は！食パンとフルーツとたまごが！ついて
！三五〇円じあり！だからどの店に行っても
！人人じ待っている店も中には！あるのである！
ですから新聞もなかなか手に入らないという訳じござる、
そして！席に戻ろうとしていた私に！
「仙人〜 新聞だら〜 ここにあるよ！」
と！私に声をかけてくれた人があった！
ああ！ありがとう！私は良い気分じ新聞を
読み始めた！その一瞬！私の目が！心が！
新聞の記事に！くぎづけになる！
いや！いや！新聞に心を奪われていた！
未曾有な！大きな字じ載せられていた！
西尾市の中学生が「いじめられ自殺」！
私は見ては！いけないものを見てしまったようじあり！
あってはいけない事の事実を！いま見てしまったのだ！
本当！本当に！出来れば！感違いの記事じ

であってほしいと願った。

私の心には、我が子どもと、かなり合っていた。私の目から、大粒の涙が流れ入る新聞の上に！・・・。

どうして、親は、先生は、大人たちは、この子どもの苦しい心の内を聴いてやれなかったのか。この子が苦しい思いで、毎日々々学校に通っていたのが。

そのサイン、すらも、見抜けなかったのか。わかろうともしなかった愚か者になり下がってしまったのか。私は、悔しくくくくくくくくたまらない。秋上にこの子がなぜ無念であったろうな。。。。。。

私は新聞に流れ落ちた涙を、ふきとり、目の涙を、なんとなくふき、大きく息を吸い込んで。私のまわりはお客さんで、いっぱいですから、朝から涙を見せる訳にもいかないし。

このような時に、読者の方はどのような行動を見せますか。。。。。